第三章　富士宮まつり

第一節　大宮のまちと富士宮まつり

『袖日記』にみる大宮のまちの祭り

令和七年（二〇二五）現在、富士宮市が誕生して八三年を迎える。富士宮市の前身である大宮町は、明治二二年（一八八九）の町村制施行により一一町村が合併して成立した。その名のとおり、大宮町は富士山本宮浅間大社（以下、浅間大社、昭和五六年〈一九八一〉までは浅間神社）の門前町から発展したもので、大宮のまちの祭りは浅間大社の祭りと深く関わってきた。その一方で、大宮のまちには市役所などの官公署が集中しており、富士宮市の政治経済の中心地でもある。大宮のまちの祭りは、市制の記念式典やイベントを伴う祝祭的な面も多く担ってきた。

現在の「富士宮まつり」は、浅間大社の秋の例祭に、氏子町内が山車・屋台を曳き回し、そこで祭囃子を奏する付祭である。このような祭りは、いつ頃から始まったのであろうか。その経緯を資料から追ってみたい。

表3-1は、『袖日記』に記された祭礼である。『袖日記』は、江戸時代末期の天保一四年（一八四三）から文久三年（一八六三）まで書かれた日記である。筆者は、大宮町神田（現大宮町）の屋号マスヤ（升屋、枡彌）の横関家当主である。マスヤは酒造を営み、杜氏や下働きの人々、親戚や縁者、近隣の人々、さらには代官所や町役人との交流が多い。日記という性格上、日々の天候、近郷近在のできごと、世間の風聞などが詳細に記録され、当時の大宮のまちの様子を知る手がか

和暦（西暦）	月日	事柄
天保一五年（一八四四）	五月五日	浅間様祭り夜八ツ時に仕廻
	七月七日	浅間宮祭礼芝居あり　但しチヨボクレ之類十余人　此四五日以前ゟ町方社領ニて処々夜興行　壱幕代金弐朱也　表へ出しばん直して催しあり
	五月五日	浅間様祭り本乗夜明方　今日之群集近年珍ら敷事と云々
弘化三年（一八四六）	六月二七日	浅間様御祭礼ニ付神田中宿若イ者かさり物をいたす　古来より有之人形ニて五條之橋牛若弁慶を組立　橋ハ傘と日かさ下駄同緒ニて拵ル　大当り　場所神田橋山城ヤ利兵衛見せ也　金弐両余懸り候
嘉永五年（一八五二）	六月二七日	今夜浅間様大群衆　社領ニて花火を出す　吉原法院細工之由　夜明迄
	五月五日	本宮御祭り　本のり夜五ツ時大ニ群集
安政二年（一八五五）	六月二六日	浅間様祭り今夜花火出ス処　西風起りて糀ヤ屋根へ火落てさワぐ　前川ニ水なき故心配ス
安政四年（一八五七）	四月三日	初申御祭り　残り分ヲリ引
	五月五日	御祭り　本乗二番鶏頃
万延元年（一八六〇）	二月二四日	平等寺ニて開山之法事ニ招るゝ　かざり物異国人　若イ者異人姿ニて踊り　異国船を勝手道具ニてかざる
	四月八日	初申御祭り
	五月五日	浅間様祭り　七ツ過ゟ馬飛始　本乗夜明ニ成ル
	六月九日	本宮浅間様開帳宮　今日なげ餅
	六月二六日	本宮浅間様社内へ芝居かゝる　大矢場之処　役者ハ丁内おりや作兵衛方へ拾四人来ル由
		大道をながすちよぼくれ芝居共　炎天ニ付浅間社内をかり候処別当様初メ　社中一統承知之上　こもはり小家がけ　廿八日御祭礼奉納神楽ニ手踊りいたす

りとなっている。

『袖日記』では、浅間神社の祭礼のうち、五月五日の流鏑馬祭（当時は五月会流鏑馬神事）、六月二八日（宵祭りの二七日も含む）の御田植祭のほか、四月初申祭、一一月初申祭などの祭りが記されている。この中で「町方若イ者」が祭礼に関わるのは流鏑馬祭と御田植祭である。「若イ者」とは若い衆、つまり現在の青年の集団のことである。また、よそからやってくる旅芸人が祭りなどで芝居小屋を掛けるのを楽しみにしている様子も記述から想像される。

『袖日記』は天保一四年からの記載であるためそれ以前のことは不明であるが、弘化三年（一八四六）六月二七日の御田植祭では神田中宿に古くから「五條之橋牛若弁慶」の人形飾りがあり、若イ者がそれを組み立てたとある。神田にはこのような出し人形がすでにあり、それを若イ者が組み立てて祭りを盛り立てていたことがわかる。

そして最もまちが活気づいたのが、万延元年（一八六〇）の年である。この年は、富士山が出現したとされる紀元前三〇一年庚申の縁年にあたり、六〇年に一度巡ってくるこの年に富士登山をすると御利益があると信じられ、女人禁制の緩和もあった。当時は六月一日が山開きであり、九日には浅間神社が御開帳され投げ餅もあった。登山者でにぎわう開山中の六月二八日は御田植祭で、二六日に境内で芝居がかかり、二八日には奉納神楽の手踊りもあった。二八日は、在（まちの周辺村落）でも町方で家台（屋台）を多く曳き出すと評判になり、「夥敷（非常に多くの）」人出があったという。さらに、七月六日にも浅間神社の祭礼があり、東町の若い衆が屋台を出した。神田川橋で夜明けを迎える頃まで曳き回し、屋台は社領でも曳き回しが行われ、芝居役者も混じって踊った。

また、文久二年（一八六二）九月七日から一二日にかけて、若イ者が俄（即興的な素人芝居）をやり、屋台や出し（飾り物）を制作して、

六月二八日	浅間様御田植群集　芝居大入　在々ヘハ町方ニて家台多く引出スと申大評判故　夥敷人出ル
七月六日	浅間様御祭礼　東町若イ衆家台出ス　夜九ツ過神田橋ニ至る　神田川橋ニて夜明ニ成（中略）　家台明七日社領を引　芝居役者交り　新宿熊吉と申若者踊ル
一一月七日	初申御祭り休日
九月七日	西町若イ者俄の催し有之ニ付　中老惣助　茂兵衛呼出し　差留申聞候
九月八日	当町若イ者家台之儀決而仕間敷段承伏いたし候と　茂兵衛惣助今挨拶有之候
文久二年（一八六二） 九月一一日	若之宮様　御神酒廿四文　米弐合
	若イ者俄之儀　昨十日夜半中老安兵衛　猶八〆方へ来り　町方の儀仰之通り相守り可申候間　子供の座敷踊り之処大目ニ願入由申来ルニ付神妙之儀ならす知らぬ分と申
	今夜半若イ者神田橋ニおいてダシ俄の儀はじめ候処大雨ニて休ミニ相成事
	暁ニ家台崩す
九月一二日	東町方ニハ飾り物牛ニ車の座敷かざりあり
	当町方今夜踊り子　糀ヤ娘二人　大和ヤ娘　はし糀ヤ熊太郎　中泉ヤ又蔵　はし下たヤ米吉　中天竺ヤ市蔵など一両日習ひ候よし　外共十二人おとり子
	十二日昼夜ニて子供おどる　夫今所々ニて興行　十月頃もいたす

表 3-1
『袖日記』にみる大宮のまち祭礼

写真 3-1
富士宮まつりで披露される
磐穂神田組の手古舞

女や子どもが踊るなど、現在の富士宮まつりの手古舞の様子によく似た状況が見えてくる（写真3-1）。

流行病除けの祭り

幕末の大宮のまちでは浅間神社の祭り以外の時にも、若イ者が先導して芝居や屋台、踊りなどの催しを行うようになった。なぜ、まちの祭りが神社とは無関係に行われたのであろうか。幕末といえば、安政五年（一八五八）はコレラが全国的に大流行した年である。吉原宿では七月中旬に「三日コロリ」、「ボウショ病」などと呼ばれて流行し、やがて大宮町方でも次々と感染して一二〇人ほどの死者が出ている。『袖日記』によれば、それも八月二八日には静かになった（納まった）とある。

九月に入ると、町方や在の各地で角力（相撲）興行があった。九月一二日から一四日までは若之宮（現元城町）で行われ、一七日には村々では角力が、芝居神楽も近村で興行があった。これは「当病ニ死残りし喜び也」と記され、多数の死者が出た恐ろしい流行病から逃れ、その感謝を込めて祭りが催されたということであろう。角力や神楽は、悪霊を鎮めたり疫病退散を願ったりする時に行われるものだった。

文久二年は、麻疹が流行った年である。『袖日記』の六月二二日に「はしか当町所々ニあり」と記され、七月一一日には村々で麻疹が非常に流行り、「子供ハかるし　大人ハ重シ」とある。しかし、八月一一日、一二日それぞれ子どもの葬列が三つ通るとあり、子どもも命を落していく。九月八日から町方の若イ者が屋台を出したいと申し出た。それは、子どもも含む多くの死者の供養のためと疫病退散を願うための催しだったかもしれない。

写真 3-2　青年協議会会長挨拶（令和 4 年〈2022〉）

大宮のまちの祭りは、江戸の文化に敏感な若者が、その当時の流行を取り入れた祭りであり、まちの重役から自主運営を任され、まちの活性化を担うものであった。これは、近年の新型コロナウイルス感染症拡大による世界的なパンデミックを経験し、令和四年に感染対策を講じながらの富士宮まつりの開催に至った富士宮まつり青年協議会にも引き継がれた伝統であると言えよう（写真3-2）。

富士宮市制記念式典としての富士宮まつり

明治維新を迎え、浅間大社の社領や祭事に大きな改変が行われた。しかし、町や近隣の村々の人々が楽しみにしていた五月の流鏑馬祭や六月（改暦以降七月七日）の御田植祭は、変遷はあるものの現在も続けられている。江戸時代、浅間神社の大祭であった四月初申祭は、平成一八年（二〇〇六）に浅間大社千二百年祭を機に山宮御神幸が復活、一一月初申祭は明治六年（一八七三）に新暦一一月四日に固定化された（本編第二章）。

表3-2は、大宮のまちの行政的な変遷と祭りとの関わりを示した年表である。この中には祭りに影響を与えた出来事もあげた。この表から読み取れるのは、浅間大社の秋の例大祭（秋宮）だけではなく、日露戦争凱旋や大宮町大火復興、大正・昭和の御大典など、さまざまな記念式典をきっかけに山車や屋台が購入されたり建造されたりして曳き回されていることである。そして、現在の富士宮まつりは次のような変遷を経ている。

和暦	西暦	事　　柄
明治　6 年	1873	浅間神社大祭を旧暦 11 月初申日より新暦 11 月 4 日に固定
明治 22 年	1889	町村制施行により 11 町村が合併し大宮町誕生
明治 29 年	1896	7 月 14 日、浅間神社が官幣大社となる
明治 37 年	1904	日露戦争勝利を記念して、高瀬家より磐穂に山車が寄進される
明治 42 年	1909	11 月 23 日、大宮町青年会が組織される
明治 44 年	1911	秋祭りに湧玉の立・松山・寿・高嶺・磐穂・咲花の 6 組が山車・屋台を曳く。まつり青年の組織を発足
大正　2 年	1913	7 月 20 日、富士身延鉄道の富士－大宮間が開通
大正　4 年	1915	11 ～ 12 月、大正天皇御大典。御幸・羽衣・立・神立・寿・高嶺・磐穂・咲花が山車・屋台を曳く
大正　5 年	1916	9 月 15 日、大宮町青年団が再編される
大正　7 年	1918	7 月 6 日、神田宮御田植祭地に社殿再建
大正　8 年	1919	常磐が底抜屋台を新造、翌 9 年に芸妓を乗せて練り歩く
大正 12 年	1923	常磐と神田が分かれ、山車は高瀬家のある常磐の所有となる
		9 月 1 日、関東大震災
昭和　3 年	1928	昭和天皇御大典。多くの祭り組が山車・屋台を曳き廻す
昭和　7 年	1932	4 月 21 日、大宮町大火。神田川以東の市街地中心部が焼け、北神田の一部を残し神田町・神田橋・神田宮町などが灰燼に帰す
昭和　9 年	1934	5 月 1 ～ 6 日、大宮町復興祭。瑞穂・咲花・大和・常磐・浅間・神田・高嶺・御幸・松山・羽衣・神立・立・寿・貴船が山車・屋台を出す
昭和 11 年	1936	浅間神社昇格 40 周年
昭和 12 年	1937	神立、山車・屋台を焼失
昭和 15 年	1940	11 月 10 日、紀元二千六百年
昭和 17 年	1942	6 月 1 日、大宮町と富丘村が合併し富士宮市誕生。神賀は福地から分かれる。戦時中祭りは休止
昭和 21 年	1946	浅間神社秋祭り再開
昭和 27 年	1952	8 月 2 日、市制 10 周年記念祭にて仮装行列
		11 月 3 日、浅間神社秋祭りで楼門前にて宮参り
昭和 41 年	1966	2 月、富士宮ばやし保存会発足。8 月、富士宮囃子が市無形文化財に指定される
		9 月 26 日の台風 26 号の被害により秋祭り中止
昭和 42 年	1967	市制 25 周年。現行の宮まいり始まる
昭和 43 年	1968	明治 100 年記念の秋祭りに大宮木遣復活
昭和 52 年	1977	市制 35 周年。共同催事始まる
昭和 53 年	1978	浅間神社秋祭りに神田区小学 6 年生手古舞参加
昭和 61 年	1986	神社前 10 区勢揃い。祭り後、秋まつり青年協議会発足
昭和 63 年	1988	昭和天皇病状悪化により、山車・屋台の曳き廻しを自粛
平成　2 年	1990	共同催事雨で中止
平成　4 年	1992	市制 50 周年記念祝賀式典
平成　7 年	1995	3 月 20 日、富士宮囃子が静岡県無形民俗文化財に指定される
平成 18 年	2006	浅間大社千二百年祭
平成 19 年	2007	市制 65 周年記念事業。『浅間大社例祭　富士宮秋まつり』発行
平成 23 年	2011	「富士宮まつり」と改称、宮まいりを参加区全 20 区にて行う
平成 24 年	2012	市制 70 周年記念事業。『富士山本宮浅間大社秋の例大祭　富士宮まつり』発行
令和　2 年 令和　3 年	2020 2021	新型コロナウイルス感染症拡大により富士宮まつり中止
令和　4 年	2022	市制 80 周年。新型コロナウイルス感染対策を講じて 3 年ぶりの富士宮まつり開催
令和　5 年	2023	『富士山本宮浅間大社秋の例大祭　富士宮まつり』発行

表 3-2　大宮のまちの祭り

明治二二年の町村制施行によって大宮町が誕生し、同三七年（一九〇四）には日露戦争の凱旋記念を機に高瀬家より磐穂に山車が寄進される。同四二年（一九〇九）には大宮町青年会が組織され、同四四年（一九一一）一一月三日の浅間大社秋祭りに六組の山車・屋台が曳かれる。このとき、大宮町青年会とは別に「まつり青年」の組織を発足させる。当時、社人町（宮本区）の尋常小学校五年生だった村上喜巳氏（明治三三年生）は、次のように振り返っている。

> 子供連として揃ひの衣装を着せて貰い、練り物の綱を曳いた。当時社人町は戸数人口すくなく単独でお祭りを催すことに、諸般の事情が許さなかったものか、寺地（寿町）と合併して〝寿〟の祭り組名の下に一切が運営された。

この頃は現在のように区単独で山車や屋台を曳くことはできず、組名も固定したものではなかった。当時の大宮西町（現西町）の祭り組である松山・立・寿・高嶺では、「親名」として「湧玉」を冠した。それが今日の親名の由来となっている。一方、神田川東側では、磐穂（神田町・仲宿）・咲花（連雀・青柳・新宿）が祭り組として参加したという（村上　一九六七）。

大宮町は経済的な発展とともに人口も増え、昭和一七年（一九四二）に富丘村と合併して富士宮市が誕生する。その間には富士身延鉄道開通、大正の御大典、昭和の御大典、大宮町大火後の復興祭と続くが、これらは浅間大社の祭礼とは無関係の日程で行われている。富士宮市が誕生した昭和一七年は第二次世界大戦の真っ最中であり、当然のことながら祭囃子のような鳴り物は禁止された。

浅間大社の秋の例祭は昭和二一年（一九四六）に再開し、一部の氏子町内が山車を曳き回したが、散発的だったという（咲花区　一九九七）。大宮のまちの祭りが復活するのは、昭和二七年（一九五二）八月二日の市制一〇周年記念祭である。このときには、仮装行列などのイベントも行われた。また、同年の浅間大社の秋祭りでは、楼門前で宮参りをしている様子が写真に残されている（写真3-3）。同四二年（一九六七）には、市制二五周年で現行のような境内に入場する宮まいりが始まった。しかし、昭和三〇年代から昭和四〇年代にかけて行政区の分離独立や青年層の祭り離れなどにより、祭りは低迷する（富士宮まつり青年協議会　二〇二三）。

その後、青年層のUターンなどにより昭和六一年（一九八六）の秋まつり終了後、秋まつり青年協議会が発足した。平成七年（一九九五）に富士宮囃子が静岡県無形民俗文化財に指定され、同二三年（二〇一一）には「浅間大社秋祭り」から「富士宮まつり」に改称し、宮まいりが全参加区二〇区にて行われた。

現在、富士宮まつり青年協議会では、市制施行記念事業として記念誌を発行し、富士宮まつりの伝統の記録を残している。五年から一〇年ごとに記念誌の改訂版を刊行しており、この祭りが市制施行一〇周年記念をきっかけに、市の記念事業と共にその形を調え現在に至っていると言える。

写真 3-3　市制10周年記念の秋まつり（昭和27年）

写真 3-4　さまざまな時代の富士宮まつり

左上）昭和 47 年（市制 30 周年のとき）　右上）大正 4 年（大正天皇御大典の頃、宮本）
左下）令和 4 年（市制 80 周年のとき）　右下）昭和 11 年（浅間神社昇格 40 周年、高嶺）

図 3-1　富士宮まつり祭典区の会所位置図（地理院地図 Vector を加工して作成）

第二節　日程と祭典組織

祭りの日程

富士宮まつりは富士山本宮浅間大社（以下、浅間大社）周辺の二〇区が参加して、一一月三日から五日までの三日間行われる。山車・屋台の曳き回しと静岡県無形民俗文化財の富士宮囃子が特色である。祭りの大まかな日程は次のとおりである。

なお、富士宮まつりの祭典区名は行政区名と同義であるため、本節では原則的に行政区名で表記する。

◆一一月三日　午前九時　宮まいり

参加者全員が浅間大社に参詣する。山車・屋台は伴わず、道囃子を奏しながら区ごとに隊列を組んで境内に集結する（写真3-5）。修祓や玉串奉奠の後、市長・富士宮まつり委員会委員長・ミス富士山が挨拶をし、くじで選ばれた区（令和六年〈二〇二四〉は琴平区）の祭典長の号令で全区一斉に富士宮囃子を奉納する（写真3-6）。式典後は神田区の木遣部がうたう大宮木遣りに送られて参加者は自区へ戻る。その際、各区青年長は浅間大社から御幣を受け取る。宮まいり後は主に自区内で山車・屋台を曳き回し、区によっては競り合い（後述）も行う。この日の夕方以降を宵宮と呼ぶ。三日間の曳き回しについては区ごとに細かなタイムスケジュールが組まれ、会所前などで囃子や踊りが披露される。

◆一一月四日　午後四時　本宮

山車・屋台の曳き回しが行われる。全二〇区が浅間大社周辺に集結する共同催事「本宮」では一斉に囃子と踊りが奉納され（写真3-7・8）、その後は山車・屋台を移動させながら、各所で競り合いを行う。

◆一一月五日

主に自区内で山車・屋台の曳き回しを行い、終了後には御幣を浅間大社に納める（写真3-9）。

富士宮まつり委員会

富士宮まつり全体を統括するのは「富士宮まつり委員会」（以下、委員会）である。表3-3のように、山車を運行する二〇区と、それをサポートする行政・浅間大社・その他団体によって構成されている。推進本部長である市長をはじめとして多くの委員には公職従事者があたり、副委員長となっている各区祭典長は各行政区の区長が担っている。委員長と統括副委員長には、全体を把握・統率できる人材として、区長と青年協議会会長の両方を経験した者が望ましいという。

委員会の総会は五月に市役所で行われ、以後は祭りの実施計画を「富士宮まつり青年協議会」（後述）が作成する。そして九月の委員会全体会議で同協議会から計画が示されて承認されると、いよいよ一一月の本番に向けて囃子や踊りの練習、競り合いの打ち合わせなどが本格化していくのである。

富士宮まつり青年協議会

富士宮まつりの実際の運営は「富士宮まつり青年協議会」、通称「青年協」が担う（写真3-10）。宮まいりと本宮の実施計画の作成や参加区との連絡調整、外部との交渉などを行う。青年協は各区青年から一人ずつが出向して構成され、宮まいり・宵宮・本宮・踊り・広報・JR・視察などの担当がある。全体の調整を図るうえで自区

写真 3-8　一斉踊り

写真 3-5　宮まいり

写真 3-9　御幣を納める神田区青年

写真 3-6　富士宮囃子の奉納

写真 3-10　本宮を運営する青年協議会

写真 3-7　本宮

表 3-3
富士宮まつり
委員会の組織
（令和 5 年度）

役職名	所 属 な ど	人　数
委員長	観光協会及び実施区の互選により選出	1
統括副委員長	同上	1
副委員長	各区祭典長	20
副委員長	富士宮まつり青年協議会会長	1
副委員長	富士宮囃子保存会会長	1
推進本部長（顧問）	富士宮市長	1
顧問	市議会議長、商工会議所会頭、浅間大社宮司、区長会長	4
参与	富士宮市産業振興部長	1
委員	観光協会会長、商工会議所専務理事、浅間大社権宮司（ごんぐうじ）、商店街連盟会長、観光協会専務理事、交通指導員会長、警防救急課長、市民生活課長、観光課長	9

の動きを熟知している必要があり、青年長経験者が出向することも多い。青年協の年間計画は表3-4のとおりである。

祭りに参加する二〇区は神田川を境にして、東は「磐穂」「咲花」、西は「湧玉」と区分されている。青年協の会長は、東の区と西の区が交互に担うようローテーションが組まれており、任期は四月から三月までの一年間である。新年会で会長の半纏が次年度の会長に引き継がれる。また、会長予定者は就任前年に「統括」（副会長）として会長を補佐しつつその職務を見習い、会長の翌年と翌々年は「顧問」として会長を支える。

青年協発足の経緯は次のとおりである。前節で述べたように、昭和三〇年代から四〇年代にかけて秋祭りは低迷期であった。山車・屋台の売却や解体をする区が相次ぎ、山車を所有する区でも自区内だけで曳き回しを行った。区内の狭い道を曳き回す山車・屋台の様子を「あぜ道祭り」と呼ぶ人もいたと川端則貴氏（昭和二四年生、初代青年協会長）は語る。昭和五〇年代に入ると、徐々に囃子復活の兆しが見え始め、区ごとの「あぜ道祭り」を氏子地域全体の祭りにしようという動きが持ち上がった。そこで、かつて実施されていた「競り合い」（写真3-11）を復活するためのルール作りと全山車を集結させる共同催事が提案され、その整備を担う組織として昭和六一年（一九八六）に青年協が発足したのである。以前の競り合いは、すれ違いができない狭い道でどちらが道を譲るかを囃子で競ったもので、負けた組は山車・屋台を曳き下げて道を譲り、勝った組は「昇殿」を奏しながら進んだという。しかし、現在はあらかじめ時間と場所を決めて計画的に実施される。三日間で七〇回以上の競り合いが行われており、三区や四区で競う場合もあるが、トラブルが起きないよう事前に綿密な打ち合わせをする。競り合いは富士宮まつりの大きな見どころとなっている。

囃子を支える組織

富士宮囃子を奏する囃子方は区ごとに公会堂などで稽古を行う。例えば浅間区では、青年（中学生以上）が毎月第三土曜日に、そして会所開きをする一〇月一日からは、小学生も加わって日曜・祝日を除く毎晩稽古を行う。祭り低迷期に中断していた囃子を復活させた際にはまず子ども会から稽古を再開したといい、今でも青年が子どもたちに熱心に教えて伝統をつないでいる（写真3-12）。また以前は笛を女性、太鼓を男性が担当することが多かったが、今は全員が全ての楽器を練習するという。

囃子方は全員、「富士宮囃子保存会」（以下、保存会）の会員である。昭和四一年（一九六六）二月、「富士宮ばやし保存会湧玉会」が発足し、同年八月に富士宮囃子が市の文化財に指定された。しかし、その後は同会の活動が下火になってしまったため、県指定にあたって改めて平成九年（一九九七）に現在の保存会が編成された（本章第三節）。保存会の理事は各区の囃子方から一人ずつ計二〇人が選出され、年度始めに理事会（総会）を行っている。会長・副会長・顧問・相談役・監事・会計・会計監査の役職があり、これら幹部は青年協や浅間大社青年会（後述）の会長経験者が多いという。保存会の活動としては、八月の「囃子の集い」や二月（節分）の老人ホームでの慰問演奏のほか、要請に応じて民俗芸能大会などにも出演する。

浅間大社青年会は昭和四九年（一九七四）に発足し、浅間大社の例祭の手伝いや清掃などに奉仕する団体である。現在は四〇歳以下の男女合わせて二〇人ほどが参加しており、富士宮まつり参加地区以外の者もいる。この青年会の中に囃子同好会があり、月一回ほど稽古を行い、一一月四日の朝には浅間大社境内で奉納囃子を奏する。同好会には実力者が多く、互いに演奏技術を学び合う場となっており、同好会への参加を目的に青年会に入る者も多いという。

写真 3-12　浅間区のお囃子の稽古

写真 3-11　松山区と二の宮区の競り合い

月　　日	内　　容	備　　考
1 月 20 日	新旧役員会	全体運営方針説明、スケジュール確認
3 月　4 日	新年会	会長半纏の引継ぎ
3 月 24 日	第一回役員会	役割分担決定、参拝マナー講習
4 月 28 日	第二回役員会	各部会による運営方針説明
5 月 11 日	富士宮まつり委員会総会	青年協会長出席
5 月 26 日	第三回役員会	宮まいり抽選会に向けた各部会の状況確認
6 月 16 日	青年協議会総会 （第一回全体会議）	各区青年代表も参加 宮まいり抽選会・令和 4 年度報告・令和 5 年度計画など
7 月 21 日	第四回役員会	本宮抽選会に向けた各部会の状況確認
8 月 18 日	第五回役員会	本宮抽選会 各部会状況確認
8 月 26 日	意見交換会（納涼会）	
9 月　8 日	第六回役員会	全体会議の資料確認
9 月 11 日	富士宮まつり委員会全体会議	実施計画案を検討
9 月 22 日	第二回全体会議	各区青年代表も参加 会議終了後に競り合い事前交渉の日程などを適宜調整
10 月 13 日	第七回役員会	まつり期間中の分担最終確認 行動予定表の確認
10 月 28 日	祭典本部設営	
11 月 10 日	第八回役員会	青年協の反省会
11 月	富士宮まつり委員会反省会	
12 月	青年協役員忘年会	

表 3-4　青年協議会の年間計画（令和 5 年）

区ごとの祭典組織～神田区を例として～

祭りに参加する二〇区は行政区を基本としている。従って各区には自治会役員が必ず存在し、その一部は祭典組織と重なっている。例えば神田区では、平常時には区長（一人）・町内会長（三人）・総務（一人）・会計（一人）・会計監査（三人）という役職があるが、祭りの時には、祭典長を務める区長を筆頭に、自治会役員が祭典組織の役員に割り当てられる。一方で、祭りの運営には平常時には無いさまざまな係とそれを担う多くの人手が必要なので、どの区でも、交渉・進行・山車・囃子方・踊り方など、祭典専用の部署を編成する（写真3-13）。組織構成は区によって異なるが、令和五年（二〇二三）度の神田区では表3-5のように分担された。次に神田区のいくつかの係の仕事内容を具体的に見てみよう。

神田区は祭り期間中、令和五年に六回、令和六年に七回の競り合いを行った。また会所前や祭典長宅前などでも囃子や踊りを披露し、商店が多い神田区では新店舗祝いの囃子披露もある。狭い路地には「先導車」（放送機材を積んだ小型の屋台）だけが入り、山車と別の動きをする場合もある。これらを組み込んだ三日間の運行コースと時間配分を計画し、他区との連絡調整を行うのが進行部である。祭典中は山車が計画どおりに運行できるよう管理する。準備段階から大変忙しく重要な係で、進行長は次期青年長候補でもあるという。

交渉部には青年長を終えた人が入る。特に交渉長は青年長の後見的な立場で、青年長が交代するまで共に重責を担う。競り合いについての相手区との事前打ち合わせには、総進行部長である青年長と共に、交渉長・進行長が参加し、ほかに放送長・手子（てこ）長・囃子長なども参加する。祭典中には、交渉部が自区の山車を先導するほか、神田区内を通過する他区の山車を交渉部が区境で出迎える（写真3-14）。そして、その山車が区内を運行する間は常に先導し、区境で隣接区に引き継ぎをして見送る。神田区は浅間大社に近く、浅間大社へ向かう他区の山車が数多く区内を通過するため、特に本宮当日の交渉部は分刻みで動いているという。なお神田区では、数年前までは交渉部から一人を青年協に出向させていたが、交渉部の人数不足により、進行部から出向させるようになった。

神姫（かんひめ）部は先導車の運行管理を担当する。かつては全ての区で女性が山車に乗ることはできなかったが、今ではその慣例を踏襲しているのは神田区だけになった。とはいえ、現在では囃子の担い手として女性も欠かせない存在になっている。神田区では女性は先導車で囃子を奏し、「小競り合い」といって区内で余興的に山車（男性）と先導車（女性）が競り合いを行うこともある。

神田区には木遣部がある。宮まいり終了後に各区が境内を出る際には、神田の木遣部が「大宮木遣り（神田木遣り）」をうたって見送る。また神田区内では、宮まいりに出発する際の「出の儀」や最終日に青年が浅間大社へ御幣返却に行く際にも木遣がうたわれる。

神田で手古舞の子どもたちを指導するのは芸者の師匠である。現在では芸者は少なくなったが、平馬一衛（ひらまかずえ）さん（昭和一六年生）によると、神田区内にはかつて芸者の置屋が数多くあり、二〇～三〇人の芸者を抱える大きな置屋もあった。割烹（かっぽう）旅館も多く、富士・吉原の製紙業者がそれらの旅館に芸者を呼んで取引先の接待をしたのだという。平馬さんの母親（大正五年生）は日本髪を結うことができる髪結いで、美容師を一三、四人も雇って芸者の整髪をしていた。常磐（ときわ）区では大正八年（一九一九）に底抜け屋台を新造して翌年には芸者を乗せて練り歩き（一九九四　富士宮市教育委員会）、かつては神田の屋台にも芸者が乗ったことがある。全ての区で芸者が祭りに関わっていたわけではないが、商いの中心地として長く栄えてきた大宮のまちならではの祭りの特徴といえよう。

写真 3-14　浅間区との区境で常磐区の山車を迎える神田区交渉

写真 3-13　神立区の役職を示す襷（たすき）

役　職	人数（兼任を含む）	役　　割	備　　考
祭典長	1	全体を統括	＝区長
副祭典長	3	祭典長を補佐	＝町内会長
大老	8	相談役	
財務部	14	会計係、会所で祝儀の管理	財務部長＝区会計
総務部	4	名簿作成など庶務担当	区総務３名を含む
総進行部長（青年長）	1	山車運行の責任者	＝睦会（むつみかい）（青年会）会長
睦会相談役	3	睦会を補佐	＝睦会後見
交渉部	6	競り合いや出入区の立ち合い、山車の先導	
進行部	5	山車の運行管理	うち１名青年協出向
放送部	4	音響、司会進行	
手子方	３＋有志	山車の操作	事前に梃子棒（てこぼう）作り
囃子方	3	囃子担当	
神姫部	3	先導車の運行管理	睦会の女性
舞踊部	４＋有志	踊り担当	
木遣部	神田木遣連	木遣担当	
交通保安部	７＋警備員	交通整理	
給食部	８＋隣保（りんぽ）班長	食事・接待・土産の手配	食事の時間と数は進行部が指示
会所部	９＋婦人部・隣保班長	会所の管理、接待	大老や財務部との兼務が多い
救護部	4	ケガや急病への対応	
手古舞（てこまい）部	2	手古舞の責任者	奉仕者母（子ども会）
手古舞付添	3	手古舞奉仕者の世話	同上
手古舞指導	1	手古舞の指導	芸者師匠
手古舞奉仕	5	手古舞担当	小５～中２女子

表 3-5　神田区祭典組織表（令和 5 年）

第三節　富士宮囃子と大宮木遣り

山車・屋台祭りと祭囃子

富士宮まつり初日の一一月三日午前九時、富士山本宮浅間大社（以下、浅間大社）氏子町内二〇区の参加者が浅間大社に参集する。これを「宮まいり」といい、各区の会所から隊列を組んで祭囃子を演奏しながら境内に入る。三日間の祭りでは、山車や屋台の上で囃子を演奏しているが、宮まいりのときは太鼓を木枠にセットし、両脇の人が担ぎながら移動していく（写真3-15）。一般的には太鼓台などと呼ばれるものだが、富士宮市での呼称はとくにない。

道中で演奏するのは〈道囃子〉という演目である。〈道囃子〉のほかに、三味線が入る竹雀・篭鞠・かぞえうたなど寄席囃子に使われる演目を取り入れる区もある。かつて山車や屋台がまだ整わなかった時代には、祭囃子の演奏はこのような木枠に大小の太鼓をセットして行っていたと考えられる。屋台がなくても、また屋台のような大きな曳きものが入れない小路でも、太鼓枠だけで祭囃子を奏していたのである。

前述したように、富士宮の山車・屋台の曳き回しは幕末から明治にかけて徐々に行われるようになった。その山車・屋台の上で奏される祭囃子は、当初は独自で演奏できるものではなく、大宮のまち以外で先行して祭囃子を行っている所から人材を招いて演奏してもらったり、教えてもらったりして少しずつ完成させたものである。伝承の域は出ないが、これまで知られている祭囃子の伝播について整理してみたい。

写真 3-15　太鼓の枠を担いで進む（道囃子）

大宮の祭囃子の誕生

明治四四年（一九一一）の浅間大社の秋の例祭時、尋常小学校五年生だった社人町（宮本区）の村上喜巳氏は「大宮浅間秋祭り　大宮祭りばやし　夜噺」で、祭礼囃子について次のように語っている（村上　一九六七）。

> 練り物の屋台は、今泉方面からの借り物であったと記憶する。囃し方も、駿東郡浮島村根古屋から三名の囃子連を招聘、是に、村松、赤堀等の先輩が弟子格で参加編成された。

当時の宮本町では戸数人数が足りず、西側に隣接する寺地（寿町）と合同で「寿」という祭り組を編成し、屋台は現在の富士市今泉のものを借りてきたという。また、屋台に乗る囃し方も現在の沼津市根古屋から三人の囃子連を招いて、そこに地元の二人の先輩が弟子として同乗して演奏したのである。

このように、この当時はまだ大宮のまちに祭囃子の連や組があったわけではなく、沼津市の根方方面にいた囃子連を招き、教えを請いながら演奏したものであった。同様の話は福地区や羽衣区でも伝わり、神田でも当初は根古屋に囃子を習いに行ったのだという。また、根古屋出身の水口正道氏（通称根古市さん）は、明治末ごろに頼まれて秋祭りに笛を吹きに来たが、競り合いの恨みで唇を切られたという話も残る（富士宮市教育委員会　一九九四）。しかし、現在、沼津市根古屋に祭囃子は伝承されていない。大宮のまちから富士市吉原を経て、愛鷹山麓の根方街道沿いに進めば沼津市根古屋である。現在、富士市吉原でも六月の天王祭（吉原祇園祭）で山車・屋台が曳かれ祭囃子が奏されている（写真3-16）。大宮の祭囃子は江戸を発祥とする葛西囃子などの影響を受けていると考えられ、当時は、江戸の祭囃子が根古屋辺りまで伝播していたのであろう。それが今日の富士宮囃子の基礎となっているのである。

祭囃子は、大正から昭和にかけて現在のような演目に整えられていく。しかし、大宮のまち全体が同じ囃子を演奏したかというと、山車・屋台の建造と同じく各町内で個性があった。富士宮囃子は、笛がリーダ的役割を担い、大太鼓と小太鼓がリズムを打っていくものであるので、笛の師匠がその囃子の特徴を決定しているといっても過言ではない。それと同時に、このように大宮のまちが肥大化し、祭りが盛んになった背景には、大宮のまちの経済的発展が深く関わっている。つまり、大宮が製糸産業の隆盛によってまちが大きく発展し、富士身延鉄道の開通に伴い、富士市吉原や山梨県方面との交易の結節点となって、商談の場を提供するようになったからである。そのため、一時期は県下で最も芸者の多い町と言われたようである。祭りも当時の流行を取り入れつつ創意工夫がなされた。宮本区の井上歳丸氏の「はやし方の弁」には、次のように記されている（井上　一九六六）。

写真 3-16　吉原祇園祭の祭囃子

「聖天（ショウデン）」「四丁目（シチョウメ）」という三味、ツヅミなどが入って屋台ばやし、「ニクズシ」、「ヤタイ」が山車ばやし、何といっても大宮ばやしの真骨頂はこの山車ばやし、いわゆる喧嘩（けんか）ばやしといわれる「ヤタイ」です。

これによれば、〈聖天・昇殿〉・〈四丁目〉は三味線（しゃみせん）や鼓（つづみ）が入る屋台囃子、〈にくずし〉・〈屋台〉は山車囃子であるという。そして、現在も行われている競り合いで演奏する〈屋台〉が、喧嘩囃子と呼ばれる演目である。演目と楽器については、先の村上氏も大正初期には〈聖天〉・〈にくずし〉・〈屋台〉程度で三味線もなかったが、昭和初期に大宮の花柳界（かりゅうかい）が県下でも異例の躍進発展を遂げ、芸者の祭り参加が一部の町で行われるようになったと記している。さらに、今日の地踊りも大正末期までは無かったものである。同氏によれば、「藤枝祭りの地踊り」を昭和の初期、大宮祭りに真似させて演じたのが「大宮祭りの地踊り」の始まりだという（村上　一九六七）。

現在も、女性が山車に乗れない区があるが、屋台はソコノケ屋台（底抜け屋台のこと）で、芸者衆などが三味線を奏しながら巡行するもの、山車は若い衆が太鼓台で囃しながら練るもの、という区別があり、演奏される演目も決まっていたのかもしれない。

大宮囃子から富士宮囃子へ

以上のように、各区で祭囃子はそれぞれ発展してきたが、大正から昭和一〇年代前半は、この祭囃子を総称して大宮の名前を冠した「大宮囃子」あるいは「大宮祭囃子」と呼んでいた。やがて、昭和一七年（一九四二）に大宮町と富丘村が合併して富士宮市が誕生した。そこで、囃子名も「富士宮囃子」と称するようになった。しかし、昭和三〇年代に入ると祭りがしだいに低迷するようになる。要因は、昭和四〇年代にかけての行政区の分離独立や青年層の祭り離れによる。祭りの低迷に歯止めをかけようと、昭和四〇年（一九六五）一一月四日に文化連盟が主催して「富士宮ばやし保存発表会」を行った。翌四一年に市長を保存会長に据え、同年八月には富士宮囃子を富士宮市無形文化財に指定した。

しかし、無形文化財指定後も数年で保存会活動はしだいに衰え、組織の改編を余儀なくされた。旧保存会で技術指導を担当していた人々が「富士宮ばやし保存会湧玉会」という会を作り、各町内会の求めに応じて囃子の指導に努めてきた。主に、太鼓の指導は遠藤照夫氏が、笛の指導は有賀敏治氏が行い、祭囃子の伝承を守ってきた。昭和五〇年代に入ると、祭りは徐々に盛り上がりを見せ、昭和六一年（一九八六）に秋まつり青年協議会が発足した（富士宮まつり青年協議会　二〇二三）。

平成七年（一九九五）の県指定を契機に秋まつり青年協議会内に仮に設置されていた保存会を改め、富士宮市内の秋祭り祭典実施区と囃子を保存伝承する団体によって平成九年（一九九七）八月に富士宮囃子保存会を発足させた。

富士宮囃子の特徴

富士宮囃子の楽器編成は、大太鼓一人・小太鼓二人・笛一人・摺（すり）鉦（がね）（以下、鉦）一人である。ただし、笛と鉦は二人以上になることもある。大太鼓は長胴（ながどう）太鼓、小太鼓は締太鼓であるが、富士宮では大太鼓をオオドまたはオオドー、小太鼓をキンド（ン）またはキンドーと呼び、太鼓台の木枠には山車・屋台に向かって左側にオオド、中央と右側にキンドを据える。中央の小太鼓をナカドー（中胴）ま

たはナカ、左側をソトドー（外胴）またはソトと呼び分ける。その後列に笛と鉦が並ぶ（写真3-17）。

キンドの二人は揃って基本のリズムを打つ。熟練者はナカを打ち、笛の切替えの合図で号令をかける役である。また、オオドはキンドとの掛け合いをしながら、笛に対応して打ち分けや工夫を加える。鉦はキンドと対応してリズムを刻む。笛は囃子のリーダ役で、太鼓のリズムにメロディーをのせ、演目の切替えの合図を出す。囃子を習う際には、キンドから始め、次にオオド、最後に笛の順に行うが、区によっても異なる。鉦も習う順番は区によって異なる。楽器は別々に習うのではなく、笛のメロディーを聴きながら太鼓の稽古をしている。このようにしないと、笛と合わないばかりか、「飴屋の太鼓」のように派手に叩くだけの太鼓になってしまうからである。

太鼓の準備も入念に行う。購入元は浅草の宮本卯之吉商店が多く、富士宮のキンドはなるべく強く張ってもらい高い音が出るようにしている。オオドは響き方により高い音を好む区と低い音を好む区とさまざまで、革の張り方も異なるという。キンドの革はボルトで締める四丁掛けまたは五丁掛けのタイプで、大正期からナットで締めあげている。笛は獅子田流の七穴の篠笛である。

このような入念な準備は、競り合いと呼ばれる祭囃子の競演のためのものである。〈屋台〉はテンポが速く曲調が笛の切替えで変化していく。この切替えを切返しなどともいい、「一の切替え」または「一の玉」、「二の切替え」、「二の玉」といったり、「テンドッコイ」、「玉」といったりする所もある。これによって、〈屋台〉の演目に変化が生じ、祭りの高揚感をさらに増す効果が得られるという（富士宮市教育委員会　一九九七）。

競り合いの始まりは、かつてすれ違いも困難な狭い道で、山車・屋台を曳く区同士が道を通るため、祭囃子で競ったことに端を発し

写真 3-17　楽器編成

ている。相手の囃子のリズムを狂わせた方が勝ち、負けた方が山車・屋台を引き下げて道を譲り、勝った組は〈聖天・昇殿〉を奏しながら進んだという。現在、このような競り合いは行われていないが、各区で事前に交渉が設けられ、競り合いの細部について取り決めが行われている（富士宮まつり青年協議会　二〇二三）（写真3-18）。

現在、富士宮囃子の主要な演目は〈道囃子〉・〈にくずし〉・〈屋台〉・〈聖天・昇殿〉の四曲である。このほか、〈いちくずし〉・〈にくずしくずし〉・〈さんくずし〉・〈石田〉・〈通り囃子〉などがあったが、囃す機会に恵まれず失われつつある演目であるという（富士宮まつり青年協議会　二〇二三）。

参加二〇区がそろう宮まいりでは、〈にくずし〉から〈屋台〉を一斉に奏する。また山車・屋台の曳き回し時には〈にくずし〉を奏し、競り合いで〈屋台〉を奏する。そこで、かつてはいつ競り合いになっても囃子を止めずに即応できるように、切替えで〈にくずし〉から〈屋台〉へとつなぐ工夫がされた。また、宮本区では〈聖天〉から〈にくずし〉への切替えもあり、神田区では〈四丁目〉から〈屋台〉へつないだこともあったという。各区で工夫して個性を出していた様子がうかがわれる。

大宮木遣（きや）りの伝統

富士宮まつりでは、神田区が宮まいりにあたって木遣（きやり）を奉納する。まず会所を出発する出の儀においてうたわれ、宮まいりで各町内が境内を出る際にもうたわれる。さらに、祭り最終日に浅間大社からいただいた御幣（ごへい）を返却する際にも、木遣をうたいながら参拝する。

このような木遣は、明治二六年（一八九三）ごろの記録にあるといわれ、ほかの組でもうたわれていたようだが、昭和初年にその伝統が途絶えてしまったという。昭和四三年（一九六八）、明治

写真 3-18　現在の競り合い

百年祭記念にあたり復活させようと、神田区に大宮木遣り保存会が発足し、明治百年祭の秋祭りに神前に奉納したという（神田区二〇〇〇）。大宮木遣り保存会の栞には次のように記されている。

明治末期、大正初期小山廣吉翁の篤志に守られ、伝えられ、宮詣り町内練行の際各組とも盛んに唄はる。（中略）百年祭、秋祭り実行にあたり、神田区民村上君松翁、時の神田区長横関欽氏と語り、復活保存を計り、神田区民を中心として研鑽拡大に努む。

現在、大宮木遣りは神田区のみで伝承されているため、神田木遣りとも呼ばれている。神田区では音頭取りを「兄キヤリ」または「兄」と呼び、声が朗々と響く美声の持ち主が当たった。それに唱和する集団を「弟キヤリ」または「弟」といい、神田壮年会などのメンバーが務めた。〈手古〉と呼ばれる唄では、

朝日で解ける　解けて流れて　池の湧玉
うつす浅間の　朱けの御柱　千代に八千代に

と、湧玉池と浅間大社を愛でる祝いの言葉が入っている。昭和四三年以降、毎年秋祭りに奉納されていたが、一時期兄キヤリが不在となったため、木遣の奉納は再び途絶えた。しかし、かつて村上君松（喜已）氏の指導を受けていた小長井英雄氏が兄キヤリを務めたことにより復活し、その伝統は今日まで引き継がれている（写真3-19）。

写真 3-19　大宮木遣り

第四節　山車と屋台

江戸時代末期から明治時代

全国各地の祭礼で曳かれる造り物の呼称は、山車・ダンジリ・鉾・山・屋台など多様であるが、富士宮では後部に迫り上げ（鉾台）のあるものを山車、ないものを屋台と呼んでいる。

現存する富士宮の山車・屋台は、祭典区二〇区の二〇台（写真は二二九～二三三ページ）と、共同催事などに参加せず町内回りのみをする町内曳きの屋台四台（写真3-20～23）、合わせて二四台、それに平成五年（一九九三）から曳かれなくなり格納されている日の出区の屋台の合計二五台である。また、湧玉神立の旧屋台は解体されて倉庫に格納されている。

今に残る最古の屋台は湧玉貴船の大正二年（一九一三）建造で一一〇年以上経過しており、各区の山車・屋台はそれぞれ補修改造などを繰り返して使用してきた。主な補修履歴を略年表にしたが（表3-6）、これだけではなく車輪・鉾台・彫刻など細部の補修は経年劣化などにより必要となる。

富士宮においていつ頃から山車・屋台が曳かれていたか。それを知る文献資料として、天保一四年（一八四三）から文久三年（一八六三）まで書かれた『袖日記』が残されている（本章第一節）。この中の万延元年（一八六〇）七月六日には次のような記載がある。

浅間様御祭礼　東町若イ衆家台出ス　夜九ツ過神田橋ニ至る　（略）　家台明七日社領を引　芝居役者交り　新宿熊吉と申若者踊ル

（＝は筆者）

「家台」は屋台のことである。

写真 3-21　咲花組
昭和 57 年建造屋台

写真 3-20　磐穂常磐連
昭和 47 年補修屋台

また、文久二年（一八六二）九月一一日には

今夜半若イ者神田橋ニおいてダシ俄（にわか）の儀はじめ候処　大雨ニて休ミニ相成事　十二日暁ニ家台崩す　東町方ニハ飾り物牛ニ車の座敷かざりあり

とある。このような記録から、江戸末期には浅間神社の祭礼で屋台や山車が曳かれていたことがわかる。ただし、山車・屋台の形状についてどのようなものだったかは不明である。

その後は明治時代末期まで記録がないが、現在の湧玉福地立組（わくたまふくちたてぐみ）に明治四四年（一九一一）一一月三日山車新築落成式の集合写真が残っている（写真3-24）。また、現在も補修しながら曳いている湧玉松山組の山車は、同年に沼津から購入してきたといわれ、その形は三輪で囃（はや）子台に屋根がなく露天、後部に鉾台をもち「日本武尊（やまとたけるのみこと）」の山車人形を迫り上げるものである（写真3-25）。

写真 3-24　湧玉福地立組
明治 44 年山車新築落成式（福地区蔵）

写真 3-25　湧玉松山組
明治 44 年購入の山車

写真 3-23　湧玉福地立組
平成 26 年建造屋台

写真 3-22　湧玉宮本
平成 20 年改造屋台

大正時代から昭和時代

大正に入ると、各町が次々と山車・屋台を建造する。大正二年には、湧玉貴船（当時は寿）が町内の大工・彫刻師の手で屋台を造り上げた（写真3-26）。この屋台は昭和九年（一九三四）大宮町大火の復興祭を行った年に寿から現在の貴船に変わり、現在もまだ補修しながら曳いている。

大正四年（一九一五）、この年は大正天皇御大典奉祝の年で、当時は御幸を名のっていた現在の湧玉宮本が山車を建造する。同年に湧玉神立が最初の山車を、その後は同七年（一九一八）に磐穂瑞穂組、翌年に磐穂常磐連、同一〇年（一九二一）に湧玉羽衣、同一五年（一九二六）に磐穂浅間連が次々と山車・屋台を建造・購入していった。

大正一二年（一九二三）、明治時代から磐穂として参加してきた神田が常磐と分かれ、昭和三年（一九二八）に磐穂神田組として山車を建造した（写真3-27）。以降も各区の山車・屋台は建造、補修が続いていくが、昭和七年（一九三二）、不幸にも大宮町の大火で磐穂大和連の屋台が焼失してしまうこともあった。

やがて第二次世界大戦が起こり、戦時中は祭りが中止となる。戦後の昭和二一年（一九四六）から徐々に青年団が結成されていき、次第に戦後の復興から祭りも復活していくようになっていった。

昭和二一年、まず湧玉神賀が屋台を建造し、同年初めて祭典に参加して屋台を曳き回した。翌二二年（一九四七）湧玉神立が屋台を建造するが、これは大正四年に造った初代の山車が昭和一二年（一九三七）に焼失してしまったためである。その後、湧玉神立は平成八年（一九九六）に山車を建造した際に、初代の山車と同様の加藤清正の人形を載せた。令和七年（二〇二五）現在、昭和二二年に建造された旧屋台は、解体されて区内の倉庫に保管されている（写真3-28）。

磐穂木の花連の祭り参加は比較的新しい。昭和二六年（一九五一）に、町内の篤志家によって屋台が寄贈された。この屋台は平成九年（一九九七）に山車を建造した後、磐穂阿幸地に譲渡されている（写真3-29）。

ところで、神田川から西側の一一区が親名を湧玉、東側の八区は磐穂を名乗っているが、咲花組には親名はつかない。明治時代末期から、旧連雀・青柳・新宿と合同で咲花として祭りに参加してきた。大正四年には大正天皇御大典を祝い、山車の曳き回しを行った。この時の山車は解体組立式であったので損傷も多く、昭和二七年（一九五二）市制施行一〇周年記念に新しく山車を建造して現在に至る。

その後も市制周年記念にあわせて、さまざまな区で山車・屋台の建造や補修が行われてきた（表3-6）。

昭和六二年（一九八七）になって湧玉福地立組が山車を建造する。湧玉福地立組は明治時代には立宿の「湧玉立」として祭りに参加していたが、戦後に湧玉神賀、昭和三五年（一九六〇）には湧玉琴平が分かれて独立していく。昭和四年（一九二九）にはすでに鍾馗の人形を載せた山車であったようだが、不幸にも昭和三八年（一九六三）の公会堂火災で山車の主要部品を焼失したため山車も廃棄処分の憂き目にあった。その後の一四年間は祭りの参加ができず、山車の建造は昭和六二年まで待たなければならなかった。

写真 3-28　湧玉神立（解体格納）
昭和 22 年建造旧屋台

写真 3-26　湧玉貴船

写真 3-29　磐穂阿幸地の旧屋台　平成 12 年に磐穂木の花連より譲受

写真 3-27　磐穂神田組

平成時代以降

現在曳かれている多くの山車・屋台は平成の時代になってから建造・補修されたものである。

平成に入ると、湧玉大中里と磐穂阿幸地が加わり全二〇台が曳き回されるようになる。そして、平成二年（一九九〇）に磐穂常磐連、平成四年（一九九二）には市制施行五〇周年記念で湧玉羽衣・湧玉大中里・湧玉高嶺（たかね）組・磐穂大和連が相次いで山車・屋台を建造した。平成六年（一九九四）には湧玉琴平が、昭和三六年（一九六一）建造の屋台を山車に改造、その二年後には天狗（てんぐ）の頭（かしら）が寄贈され人形を載せられるようになった。

平成八年（一九九六）には湧玉神立が山車を建造。平成一四年（二〇〇二）に磐穂城山組が、平成一九年（二〇〇七）に湧玉二の宮が山車を建造した。また、磐穂阿幸地は磐穂木の花連から譲渡されていた屋台を曳いていたが、平成三〇年（二〇一八）に屋台を建造した。このように平成時代三〇年間で二〇区の内、実に半数以上の一一区の山車・屋台が新しくなったのである。

日の出区は昭和二五年（一九五〇）に屋台を建造し祭りに参加してきた。しかし、平成五年から富士宮まつりに参加できなくなり、以降は屋台の町内曳きを行っていた。令和二年（二〇二〇）に新型コロナウイルス感染症が全国的に蔓延し、各地で祭り行事の自粛を余儀なくされ、屋台の町内曳きも行われなくなってしまった。この屋台は現在も倉庫に保管されている（写真3-30）。

現在は山車・屋台の建造・補修が進み、富士宮の市街地の秋は華やかな山車・屋台で彩られている。（写真3-31）。

写真 3-31　本宮で集まる山車・屋台

写真 3-30　日の出区（格納）
昭和 25 年建造屋台

区	初　代	主な建造・補修履歴		備　　考
大中里	昭和 63 年（屋台譲受）	**平成 4 年（山車建造）**	令和 2 年（山車補修）	平成 3 年までは福地から譲渡された屋台
神立	大正 4 年（山車建造）	昭和 22 年（屋台建造）	**平成 8 年（山車建造）**	初代は昭和 12 年の火災で焼失
貴船	**大正 2 年（屋台建造）**	平成 18 年（屋台補修）		昭和 9 年まで「寿」として曳いていた屋台を「貴船」に名称変更して引き継いだ
琴平	昭和 36 年（屋台建造）	**平成 6 年（山車に改造）**	平成 23 年（山車補修）	初代の屋台を山車に改造
神賀	**昭和 21 年（屋台建造）**	平成 2 年（屋台補修）		立宿（福地・琴平・神賀）から昭和 17 年に分かれ戦後に神賀として参加
高嶺	不詳（屋台建造）	**平成 4 年（屋台建造）**		昭和 30 年から 34 年まで置屋台
二の宮	平成 2 年（屋台譲受）	平成 3 年（屋台補修）	**平成 19 年（山車建造）**	初代の屋台は神田より譲渡された
羽衣	大正 10 年（山車購入）	**平成 4 年（山車建造）**	平成 20 年（山車補修）	初代の山車は中古を購入
福地	明治 44 年（山車建造）	昭和 54 年（屋台建造）	**昭和 62 年（山車建造）**	初代の山車は立宿（湧玉立）として参加
松山	**建造年不詳（山車購入）**	昭和 62 年（山車補修）	令和 2 年（山車補修）	明治 44 年に沼津の根古屋から購入
宮本	大正 4 年（山車建造）	不詳（屋台に改造）	**昭和 57 年(山車に改造)**	大正 4 年に建造した山車を 1 度屋台に改造し、昭和 57 年にその屋台を山車に再度改造した
阿幸地	平成 12 年（屋台譲受）	**平成 30 年（屋台建造）**		初代の屋台は木の花より譲渡された
浅間	**大正 15 年（山車建造）**	昭和 53 年（山車補修）	平成 4 年（山車補修）	昭和 46 年に山車を売却、昭和 53 年に買い戻し補修して現在に至る
神田	**昭和 3 年（山車建造）**	昭和 57 年（山車補修）	平成 2 年（山車補修）	大正 12 年に磐穂から独立して昭和 3 年に山車を建造、磐穂の山車は常磐が所有した
木の花	昭和 26 年（屋台建造）	**平成 9 年（山車建造）**		昭和 36 年から 54 年までは山車の曳き回しを休止
城山	昭和 26 年（屋台建造）	昭和 63 年（屋台譲受）	**平成 14 年（山車建造）**	初代は手作り屋台、2 代目は松山から譲渡された
常磐	大正 8 年（屋台建造）	昭和 47 年（屋台補修）	**平成 2 年（山車建造）**	初代は底抜屋台、2 代目屋台は現存する
瑞穂	**大正 7 年（山車建造）**	平成 1 年（山車補修）	平成 10 年（山車補修）	平成 10 年に囃子台の屋根をつける
大和	昭和 3 年（屋台建造）	昭和 9 年（山車建造）	**平成 4 年（山車建造）**	初代屋台は昭和 7 年に大宮町大火で焼失
咲花	明治年不詳（山車建造）	**昭和 27 年（山車建造）**	平成 14 年（山車補修）	初代の山車は組み立て式だった

表 3-6　山車・屋台の建造・補修履歴　（黄色は現在曳いている山車・屋台）

湧　玉						
区	山車・屋台			出し	出し制作者	彫刻師
	分類・形状	制作年	制作者			
大中里（おおなかざと） 湧玉大中里	二重鉾台山車 （囃子台唐破風仕様）	平成４年 （1992）	内藤豊人 （富士宮市）	牛若丸	不明 （京都市）	欄間購入
神立（かんたて） 湧玉神立	二重鉾台山車 （囃子台欄間仕様）	平成８年 （1996）	内藤太郎 （富士宮市）	加藤清正	神谷良一 （愛知県高浜市）	塩川勇 （富士宮市）
貴船（きぶね） 湧玉貴船	囃子屋台 （唐破風平屋根６本柱）	大正２年 （1913）	石川 （富士宮市）	―	―	元田 （富士宮市）
琴平（ことひら） 湧玉琴平	二重鉾台山車 （囃子台唐破風仕様）	平成６年 （1994）屋台から改造	望月三次 （富士宮市）	天狗 （琴平山秋葉神）	佐藤公皎 町内有志 （富士宮市）	塩川勇 （富士宮市）
神賀（じんが） 湧玉神賀	囃子屋台 （唐破風平屋根４本柱）	昭和 21 年 （1946）	山田和吉 （富士宮市）	―	―	不明
高嶺（たかね） 湧玉高嶺組	囃子屋台 （唐破風平屋根６本柱）	平成４年 （1992）	小池工務店 （浜松市）	―	―	早瀬　宏 （浜松市）
二の宮（にのみや） 湧玉二の宮	二重鉾台山車 （二層唐破風仕様）	平成 19 年 （2007）	安間工務店 （周智郡森町）	上山 （社殿）	安間工務店 （周智郡森町）	三浦正志 （名古屋市）
羽衣（はごろも） 湧玉羽衣	二重鉾台山車 （囃子台唐破風仕様）	平成４年 （1992）	佐野了 （富士宮市）	天女	亀八人形※1 （周智郡森町）	塩川勇 （富士宮市）
福地（ふくち） 湧玉福地立組	二重鉾台山車 （囃子台唐破風仕様）	昭和 62 年 （1987）	山田八茂 山田勲 （富士宮市）	鍾馗	王乾伸 （台湾）	王乾伸 （台湾）
松山（まつやま） 湧玉松山組	二重鉾台山車 （三輪露天囃子台）	明治 44 年 （1911）沼津より購入	不明	日本武尊	不明	不明
宮本（みやもと） 湧玉宮本	二重鉾台山車 （囃子台唐破風仕様）	大正４年 （1915）	細田重作 （富士宮市）	諫鼓鶏	田中清 田中旭祥 （山梨県北杜市）	細田重作 （富士宮市）

磐　穂						
区	山車・屋台			出し	出し制作者	彫刻師
	分類・形状	制作年	制作者			
阿幸地（あこうじ） 磐穂阿幸地	囃子屋台 （二層唐破風６本柱）	平成 30 年 (2018)	内田不二男 （富士宮市）	ー	ー	坪井由紀雄 坪井亮太 （富士宮市）
浅間（あさま） 磐穂浅間連	二重鉾台山車 （上山切妻 / 前山唐破風）	大正 15 (1925)	不明	社殿	不明	不明
		平成 4 年 (1992)改修	加藤正五		加藤正五 （富士宮市）	
神田（かんだ） 磐穂神田組	二重鉾台山車 （囃子台唐破風仕様）	昭和 3 年 (1928)	鈴木峯吉	猿田彦命	井筒※2 （京都市）	板倉聖峯 （富士市）
木の花（このはな） 磐穂木の花連	二重鉾台山車 （囃子台唐破風仕様）	平成 9 年 (1997)	内田雄三 内田不二男 （富士宮市）	木花之佐久 夜毘売命	神谷良一 （愛知県高浜市）	坪井正 坪井由紀雄 （富士宮市）
城山（しろやま） 磐穂城山組	二重鉾台山車 （囃子台唐破風仕様）	平成 14 年 (2002)	塩沢宏章 （富士宮市）	坂上 田村麻呂	井筒※2 （京都市）	坪井正 坪井由紀雄 （富士宮市）
常磐（ときわ） 磐穂常磐連	二重鉾台山車 （囃子台唐破風仕様）	平成 2 年 (1990)	内田雄三 内田不二男 （富士宮市）	素戔嗚尊	川崎人形※3 (さいたま市岩槻区)	近藤直登 （愛知県豊橋市）
瑞穂（みずほ） 磐穂瑞穂組	二重鉾台山車 （囃子台唐破風仕様）	大正 7 年 (1918)	鈴木藤平 （富士宮市）	米俵・御幣	米俵：町内有志 御幣：浅間大社	不明
		平成 10 年 (1998)改修	塩沢宏章 （富士宮市）			坪井正 （富士宮市）
大和（やまと） 磐穂大和連	二重鉾台山車 （囃子台唐破風仕様）	平成 4 年 (1992)	佐野幸一 （富士宮市）	源頼朝	三和人形※4 （静岡市）	旧山車の再利用 井上重雄 （富士宮市）

区	山車・屋台			出し	出し制作者	彫刻師
	分類・形状	制作年	制作者			
咲花（さくはな） 咲花組	二重鉾台山車 （囃子台唐破風仕様）	昭和 27 年 (1952)	鈴木梅次 鈴木友治 （富士宮市）	神武天皇	井筒※2 （京都市）	板倉聖峯 （富士市）

※１亀八人形は現在：有限会社人形工房亀八
※２井筒は現在　　：株式会社井筒
※３川崎人形は現在：株式会社光本
※４三和人形は現在：株式会社三和

表 3-7　現在の山車・屋台の分類および制作者　（「－」は屋台のため出しがない）

写真 3-32　磐穂神田組の山車

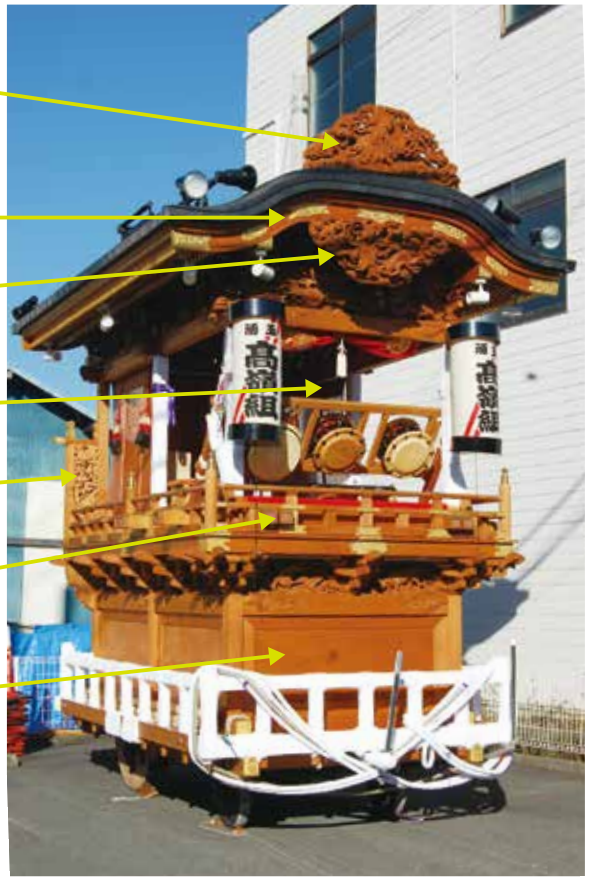


写真 3-33　湧玉高嶺組の屋台

出し（人形・造り物）	祭礼用具である曳山（山車）の鉾台の上に飾られるもので、神の依代的な存在から近年では町のシンボル的な存在になってきたもの。
高欄	基壇や縁などの周囲に取付けた手すり、欄干のこと。端の反り曲がった刎高欄や端の柱に玉ネギ状の擬宝珠をかぶせた擬宝珠高欄がある。
三味線胴	三味線の胴のように角に丸みがついた山車の高欄の下部など四方を囲む飾り。
幕（緞帳）	山車の鉾台においては上層の「四方幕」、下層の「見送り幕・後幕」があり、囃子台正面から左右の上方に回す「水引幕」、せいご台に掛ける「腰幕」などがある。
迫り上げ（鉾台）	山車の後ろで人形などを載せる部分。富士宮は二層の鉾台。迫り上げる方法は滑車でロープやチェーンを使う手動式と、電動式とがある。上がった鉾台は幕で覆われる。（写真3-34～36）
見送り	山車の背面のこと。山車の背後から、名残惜しみつつ去りゆく姿を眺めることから見送りと言われるようになった。
木鼻（拳鼻）	虹梁などの端が柱から突出した部分で、拳鼻は木鼻の拳形をしたもので唐草・浪の文様が多くつけられる。

写真 3-34　迫り上げ装置（磐穂浅間連）

写真 3-35　手動式の迫り上げ装置（咲花組）

写真 3-36　電動式の迫り上げ操作（磐穂浅間連）

車輪	木製の車輪に鉄製の外輪を焼き嵌めしたものを使う。富士宮には、三輪または四輪の山車と四輪の屋台がある。
鬼板	棟の端に取付けた鬼面の飾りで、山車・屋台の鬼板は一番目につきやすい所にあるが、鬼面以外でも豪華なものが多い。
破風	屋根の妻の部分についている合掌形の装飾板、またはその全体をいう。その形によって唐破風、切妻破風などがある。
唐破風	中央部は弓形で両端が反り曲がった反転曲線状の破風。
懸魚	妻飾りの一種。破風の頂点またはその左右に付けられる棟木や桁の端を隠す装飾を施した板。
囃子台	囃子方が祭り囃子を演じる舞台。
せいご台	山車・屋台の土台（腰）部分。台座という所もある。囃子台高欄下から台輪（土台）の間で腰板や腰幕で覆うものもある。
脇障子	本来は社殿など縁の行き止まりにある板障子のこと。左右側面の後部や山車・屋台の前後部を区画する所に立てた仕切り。

親名	区	種別	長さ(cm)	幅(cm)	高さ(cm)	高さ(cm) 含人形等	重量(t)
湧玉	湧玉大中里	山車	490	220	435	615	4.8
	湧玉神立	山車	400	300	470	530	3
	湧玉貴船	屋台	400	260	370	―	2
	湧玉琴平	山車	380	270	530	620	4
	湧玉神賀	屋台	360	270	360	―	1
	湧玉高嶺組	屋台	400	350	600	―	2
	湧玉二の宮	山車	400	240	460	600	4
	湧玉羽衣	山車	360	265	420	570	2.2
	湧玉福地立組	山車	400	200	520	750	3.5
	湧玉松山組	山車	300	280	350	430	2
	湧玉宮本	山車	340	230	464	570	2.2
磐穂	磐穂阿幸地	屋台	395	300	490	―	4.5
	磐穂浅間連	山車	367	262	430	560	3
	磐穂神田組	山車	600	300	460	650	3
	磐穂木の花連	山車	428	234	465	796	5
	磐穂城山組	山車	450	300	480	850	5
	磐穂常磐連	山車	600	300	440	650	4
	磐穂瑞穂組	山車	320	230	320	400	1.5
	磐穂大和連	山車	350	270	450	715	2.7
	咲花組	山車	430	250	406	613	2

表 3-8　山車・屋台の大きさ

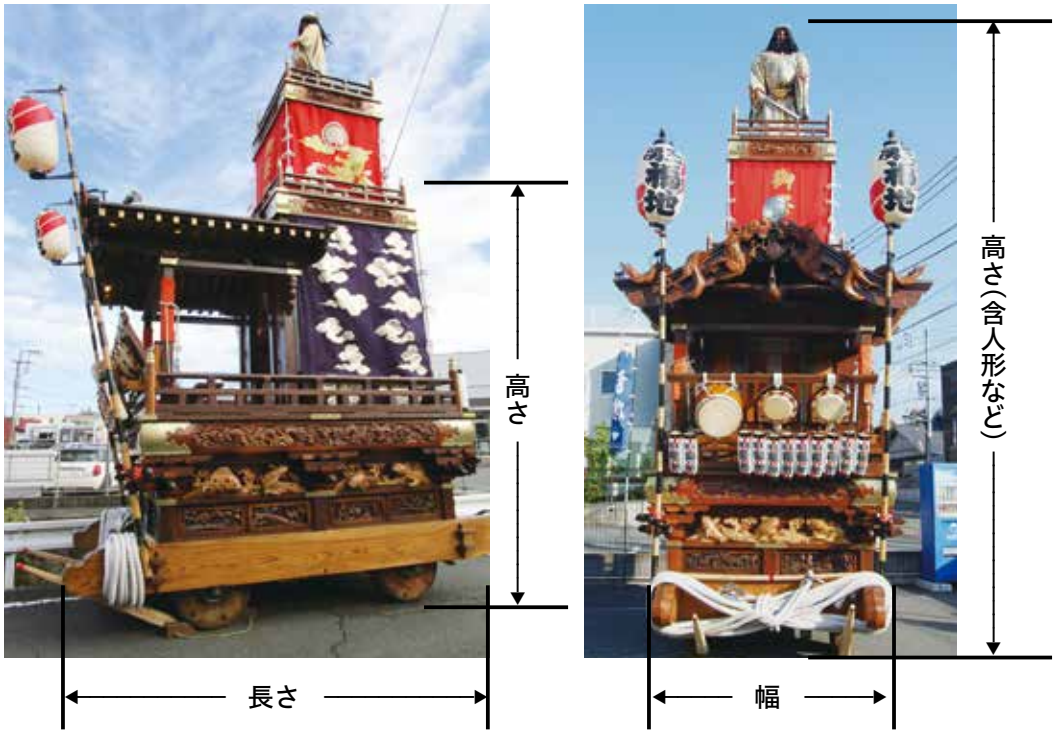


写真 3-37　湧玉福地立組の山車

方向転換と制動

重量が最大五tもある山車・屋台を操り曳き回すのは容易な作業ではない。平坦地を曳いて歩くにはそれほどの問題はないが、交差点での方向転換やUターンをする場合などは舵のない山車・屋台は梃子棒だけでは大変である。そこで、湧玉宮本が昭和五七年（一九八二）に後輪の間に操舵輪を入れ、後輪を浮かせて三輪で車体を回すようにした。その後、各区の山車・屋台は次々とこの方法を採用するようになった。また床下に取り付けられたジャッキを下ろし（電動または手動で）車体を浮かせて回す方法もとられるようになった。

しかしながら、磐穂瑞穂組（写真3-38）や磐穂神田組（写真3-39）などのように、転回地点に窪みのついた傾斜板を置き、車体の床下についた突起物（車輪状または球体）を乗せ、車体を浮かせて回す方法を採用している区もある。この方向転換方法は早期からのもので富士宮独特だと思われ、「チャンチキ」と呼んでいる。

近年各地の山車・屋台には、磐穂大和連や湧玉高嶺組、咲花組のように前輪に舵の付いた車体が多い中、この「チャンチキ」と呼ばれる富士宮方式は貴重だと思われる。

富士宮市は坂の多い町である。磐穂城山組や磐穂阿幸地、湧玉琴平など傾斜地に立地している区では、山車・屋台を曳いて浅間大社前の本宮共同催事に参加するために急坂を下って行かなければならない。最近ではハンドルやペダル操作（写真3-40）でのブレーキ装置が付いた山車もあるが、昔ながらの機械を使わず人力のみで制動をかけている山車もある。ひとたび操作を誤ると大変な事故につながる坂下りはかなりの慎重さを要する。

山車の前で土台に梃子棒を当てながら、見送りの土台に付けられた金輪から曳き綱をのばして数人がかりで後方に曳いて少しずつ下っていく（写真3-41）。ただ、ここでも最近は曳き手の減少で坂下りも困難を極めているようだ。

写真3-38　傾斜板を置いて突起物の位置に合わせる(磐穂瑞穂組)

写真3-39　傾斜板の上に突起物を乗せて山車を回す(磐穂神田組)

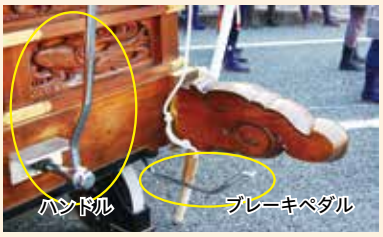


写真3-40　方向転換のハンドルにブレーキペダル（磐穂大和連）

写真3-41
（右）前方は梃子棒を土台に当て制動
（上）後方から綱を曳き、坂を下る（磐穂城山組）

山車・屋台の装飾　ー出し＝人形と造り物ー

山車・屋台の装飾で一番目につくものはやはり山車の上に載せられた人形や造り物である。本来は山車の最上部の突出した部分を「出し」といい、神を招く標示物であったが、時代が移るにつれ偶像や町のシンボル的な造り物なども載せられるようになった。その多くは戦国武将や神武天皇などの神、時代の英雄や神話・お伽噺の動物なども見かける。富士宮まつりの山車一六台の内、ここでは六台のみを取り上げる。

湧玉神立は平成八年に愛知県高浜市の神谷良一氏が二代目の「加藤清正」を制作した（写真3-42）。翌年には磐穂木の花連も神谷良一氏によって「木花之佐久夜毘売命」が制作された。

磐穂城山組は「坂上田村麻呂」を京都市の井筒（現（株）井筒）で制作した（写真3-43）。井筒で作られた人形は、ほかに磐穂神田組と咲花組のものがある。磐穂常磐連の「素戔嗚尊」は埼玉県さいたま市（岩槻区）の川崎人形（現（株）光本）で制作した（写真3-44）。このように、近年ではほとんどの出しが県外の人形店で制作されている。その中で、湧玉羽衣の「天女」だけは現在唯一県内の周智郡森町の亀八人形店（現（有）人形工房亀八）で制作されている（写真3-45）。かつては静岡や浜松にも山車人形を制作する人形店があったが、今では静岡県内より京都・高浜・岩槻への依頼が多くなった。

出しは、人形以外に湧玉宮本の「諌鼓鶏」のような竹ヒゴで作られた造り物もある（写真3-46）。これは、山梨県北杜市に工房を構える竹清堂二代目田中清氏の作。また磐穂浅間連の「社殿」は、工芸家で東照宮技術顧問の吉原北宰氏指導の下に作られ、錺金具をはじめ重厚な出しである（写真3-47）。

写真 3-42　加藤清正
（湧玉神立）

写真 3-44　素戔嗚尊
（磐穂常磐連）

写真 3-46　諌鼓鶏
（湧玉宮本）

写真 3-43　坂上田村麻呂
（磐穂城山組）

写真 3-45　天女
（湧玉羽衣）

写真 3-47　社殿
（磐穂浅間連）

山車・屋台の装飾　ー 彫刻と山車幕・提灯（ちょうちん） ー

山車・屋台を飾るものは出し（人形・造り物）のほかに、彫刻や山車幕（緞帳（どんちょう））・提灯などがある。提灯は装飾というよりも夜祭の照明の役割でもあるが、彫刻と幕は各区民の願いや心意気を表すものとなっている。

彫刻の題材は区民と彫刻師の間で協議して決められる。そこには祭りの意義が込められ吉祥（きっしょう）を表す動物・植物や故事説話などが彫られる。中でも鬼板・懸魚には四霊獣と言われる「龍」「鳳凰（ほうおう）」「麒麟（きりん）」「霊亀（れいき）」が使われることが圧倒的に多い（写真3-48・49）。

富士宮まつりの山車・屋台では、湧玉大中里・湧玉琴平・湧玉福地立組・磐穂阿幸地・磐穂神田組・磐穂木の花連・磐穂城山組・磐穂常磐連・磐穂大和連・咲花組の一〇台に龍が彫られている。鳳凰は湧玉神立・湧玉琴平・湧玉福地立組・湧玉宮本・磐穂阿幸地・磐穂浅間連・磐穂城山組・磐穂瑞穂組の八台の山車・屋台の正面に見られる。

龍は想像上の動物で、体が鱗（うろこ）を持つ蛇に似ていることから水中や地中にすみ、時には空中を飛んで稲妻を放ち、雨をもたらすとされた。龍は龍神や龍王となって神格化され、日本の水神信仰と習合（しゅうごう）して五穀豊穣（ほうじょう）をもたらす雲や雨を司る神として信仰された。また彫刻題材として、雲や浪と組み合わされることで火伏（ひぶせ）（防火）の意味も持つようになった。

霊鳥（れいちょう）の代表格と言われる鳳凰は、天下の乱れを知り名君が出て天下泰平なれば鳳凰が出現するという言い伝えからきているもので、世の中の平和を願うことで彫られることが多い。

そのほか、立身出世を願う中国故事の登龍門（鯉の滝登り）や「鶴は千年亀は万年」と言われる長寿を願う鶴と亀、「百花の王」牡丹（ぼたん）と組み合わせた「百獣の王」獅子（しし）（唐獅子）が選ばれるようである。

またその土地の説話からのものもある。富士宮市は富士山本宮浅間

写真 3-50　水引幕（咲花組）

写真 3-48　鬼板（湧玉高嶺組）

写真 3-51　見送り幕（湧玉二の宮）

写真 3-49　唐破風懸魚（咲花組）

大社のあるまちで、やはり木花之佐久夜毘売命と富士の巻狩りで有名な源頼朝に関連したテーマが見られる。

山車幕（緞帳）には、囃子台の水引幕（写真3-50）、せいご台に回す腰幕と、山車の後部鉾台を覆う見送り幕（後幕）（写真3-51・52）と迫り上げで上方に回す四方幕（写真3-53）などの種類がある。水引幕については町印を付けたものが多いようだが、見送り幕や四方幕は羅紗地に金糸銀糸などで縫い取られた見事な刺繍幕が見られる。見送り部分には区名（町名）が刺繍されている。

提灯は夜間照明用でもあるが、今では火災の心配もなく長期間使用できるLED電球が使われている。山車・屋台周囲で使われるものは左右一対正面に取り付ける「桶型提灯（区名入り）」（写真3-54）と迫り上げや囃子台軒下に吊す「丸型提灯」（写真3-55）、手に下げ区の役職名を表す「弓張提灯」（写真3-56）のほか、竹竿の先に取り付けて高く掲げる「高張提灯」がある。この高張提灯は、二本一対で行列を先導し、富士宮まつりの開始となる「宮まいり」でも行列の先頭に立ち富士山本宮浅間大社本殿前に整列する（写真3-57）。

写真 3-54　桶型提灯（湧玉大中里）

写真 3-55　丸型提灯（磐穂瑞穂組）

写真 3-56　弓張提灯（磐穂木の花連）

写真 3-52　見送り幕（湧玉貴船）
以前の「寿」の組名が見られる。

写真 3-57　宮まいり　高張提灯

写真 3-53　四方幕（磐穂木の花連）

富士宮の彫刻師

神社や寺院の建築彫刻を手がける職人を「堂宮彫刻師」というが、この職人は祭りの山車・屋台の彫刻も請け負う。かつては全国に幾多の彫工系統があり、それぞれ多くの職人を輩出してきた。近年この世界も機械化が進み、安価な欄間彫刻が市場に進出してきたこともあり、時間と費用のかかる「手彫」の山車・屋台彫刻はなかなか敬遠されがちになってきている。

富士宮まつりの山車・屋台彫刻は地元富士宮市内の彫刻師が現役で彫っている。その二人を紹介したい。

まず、宮原の坪井由紀雄氏。父親の故正氏に師事し親子で木の花区（写真3-58）、城山区の彫刻を手がけた。最近では、三代目の亮太氏と共に平成三〇年に阿幸地区の屋台で腕を振るった（写真3-59）。この坪井正氏の師匠は富士市本市場の故板倉聖峯氏である。板倉氏の彫物は神田区や咲花区の山車に作品が見られる。また、板倉氏は神奈川県湯河原町出身で、同郷で富士市水戸島在住だった伊藤高芳氏に師事した。伊藤氏は、神田区の蔵屋敷稲荷神社の向拝彫刻を手がけている。

この伊藤氏から続く富士・富士宮地区の彫工系統は東都（江戸）後藤流から分かれてきたもので江戸彫工の正統派とも言えよう。

写真3-58　胴の真向の龍（磐穂木の花連）

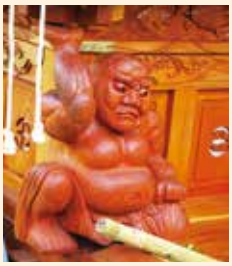


写真3-59　せいご台の力神（磐穂阿幸地）

一方、杉田の塩川勇氏は、どの系統にも属さず単独でその腕を磨いてきた。二〇歳の時に趣味で木彫を始め、五〇歳を迎える手前でサラリーマン生活に区切りをつけ、彫刻師として本格的にプロ生活に入ったのである。

木彫に憧れ堂宮彫刻師となったきっかけは、岐阜県高山市の高山祭で曳かれる屋台彫刻で谷口与鹿の「伏せ籠の鶏」を見てからだという。その繊細な作品に憧れ、各地の山車・屋台を事細かに撮影しながら研究を重ねてきた。湧玉神立の高欄下にそれが見られる（写真3-60）。それから現在まで市内ほか近郊の社寺彫刻をはじめ、三〇年のキャリアを誇る。

富士宮まつりの山車・屋台では故郷の羽衣区、それに琴平区（写真3-61）と神立区の三台の山車彫刻に携わった。その作風は坪井氏の迫力ある図柄とは異なり、塩川氏の優しい性格を見るような温もりさえ感じられる。

両氏とも富士宮生まれで現在も生業として彫刻師という職人を貫いてはいるが、現在では仕事量も減り生業としては困難になりつつあるという。坪井氏も三代目は転職し、この世界も後継者不足に悩まされているようである。

写真3-60　笑門来福 七福神（湧玉神立）

写真3-61　鬼板の龍・懸魚の鳳凰（湧玉琴平）

山車の建造過程と形状

山車の建造過程を、湧玉福地立組の『山車建造記念誌』や「琴平区山車改造経過報告資料」および「大和区山車建造資料」などから見てみると、各区とも山車建造計画立案から完成まで一年ないし二年の期間、区民一同が綿密な計画を立て建造していることがわかる。

湧玉福地立組では、昭和六二年の市制施行四五周年記念の共同催事に合わせて山車再建を目指した。その協議を始めたのは昭和六一年（一九八六）一一月で、わずか一年足らずであったため、翌年三月以降はきっちりと仕事分担のチームを作り細密な計画を立てた。

湧玉琴平は、平成六年に屋台を山車に改造した。昭和三六年に屋台を建造していたが、山車を新造する計画を立てていた。しかし、平成五年に区民館建て替えの話が持ち上がり、急遽屋台を改造する計画に変更したのである。こちらも平成六年一月になってから、区の役員会の了承を得て作業を開始する。資金を調達する寄付募集、富士宮市への補助金申請から始まり、既存の屋台を解体して一部の資材を山車に再利用した。本体工事、迫り上げ装置、電気工事ほかすべて地元業者に発注した。そして同年一〇月三〇日、彫刻や錺金具、緞帳（山車幕）の付いた新しい山車の完成披露となった。

磐穂大和連においては、昭和七年の大宮町大火によって屋台を焼失してしまった。しかし二年後の復興祭に間に合わせるように山車を建造した。その後、青年団員の減少により曳き回しを休止せざるを得なくなり、山車も解体となってしまう。それから一〇年ほど祭りに参加していなかったが、やがて山車建造の機運が持ち上がり、平成二年頃から具体的な作業にとりかかった。当時の区長はじめ建設委員が毎日のように意見交換を繰り返し、業者との打ち合わせや装置の試作など試行錯誤をしながら、二年後の平成四年の市制施行五〇周年に間に合わせた。

例として三区の山車建造経過を略記したが、その中にはどこも区民一同の協力体制が必須で、市内の業者と区内の職人がそれぞれ中心となり造り上げてきたものである。

まとめ

富士宮まつりの文献資料は少ないながらも、冒頭の『袖日記』や天保三年（一八三二）咲花組の「御祭禮御通（ごさいれいおかよい）」から江戸時代末期には浅間大社の祭礼は行われていたことがわかる（写真3-62）。

写真 3-62
天保 3 年御祭禮御通

ただ山車・屋台に関してはどのような形状のものだったのかは不明である。現在において明治時代末期に撮影された写真が唯一の資料といえる。それを見る限り、迫り上げ（二重鉾台）のある山車の上に造り物が載っている。人形が載る山車の登場は『神田区誌』によると昭和二年（一九二七）あたりからだと思われる。湧玉松山組の山車は明治四四年に沼津から購入されたと伝えられているが、当時人形があったのか定かではない。

付祭（つけまつり）から発展してきた山車・屋台の曳き回しは、江戸時代末期から関東一円に広がっていった。そして祭礼行事や山車の形態から見ても、富士宮まつりも関東一円の祭りの流れをくんでいる。前述の「琴平区山車改造経過報告資料」には、山車新造の話が出た時、「特に川越の山車の印象が強い」とある。ほかの区でも、山車建造の折には川越をはじめ浜松など、山車見学を重ねて富士宮の山車が造られていったといわれている。

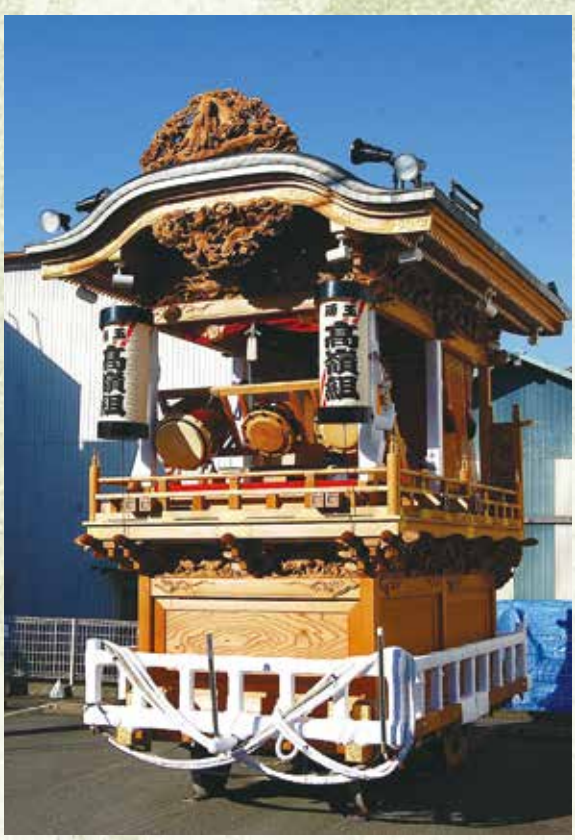
次ページより、現在の富士宮まつりで曳かれる全二〇区の山車・屋台全容写真（二〇二三年撮影）を載せる。

湧玉神立

湧玉大中里

湧玉琴平

湧玉貴船



湧玉高嶺組

湧玉神賀

湧玉羽衣

湧玉二の宮

湧玉松山組

湧玉福地立組

磐穂阿幸地

湧玉宮本

磐穂神田組

磐穂浅間連

磐穂城山組

磐穂木の花連

磐穂瑞穂組

磐穂常磐連

咲花組

磐穂大和連